

乾 昭三先生の憶い出

東京大学名誉教授
日本教育学会会長
立教学院本部調査役

寺 崎 昌 男

—

乾昭三先生には、1970年代初めの一時期、お礼の申し上げようもないほどにお世話になった。私だけではない。大学教育の研究に取り組んでいた日本教育学会の研究委員会メンバーが、先生の大きなご協力と厚意ある援助を受けた。

当時、日本教育学会の中には「大学教育研究委員会」という名の大規模な研究委員会が組織されており、会長であった故・海後宗臣先生がその委員長をされていた。ちなみに日本教育学会は、数十ある大小の教育関係学会の中では最古にして最大規模の学会であり、当時、最も力を入れた課題研究として「高等教育の大衆化と大学教育の問題ならびに課題」というブランド・テーマを掲げていたのだった。私はその中の「『大衆化』状況下における大学の学問研究と教育実践」という担当部会に属していた。

「今、現実にはどのような教育改善の実践が行われているのか、それを確かめるのが先ではないか。見学をさせてくれる大規模大学はないだろうか」

「それにしても、大学の授業を見学するなどということがいったいできるのか」

今なら授業見学や公開授業は珍しくない。だが30年前にはどうも考えられもしなかった。ああでもないこうでもない話し合っているうちに浮かんできたのが、立命館大学法学部だった。私は当時民間の研究所から立教大学文学部に移る直前だったが、それより先、日教組の教育研究全国大

会を傍聴に行き、「小集団方式」に立つプロゼミの実践報告を幾度か聞いていたのである。

しかし、つてがない。ファカルティーの方達を一人も存じ上げなかった。

だが、幸いにもそのころ大学史研究セミナーという研究会の仲間として親しくなっていたのが、大阪市立大学の石部雅亮さんだった。思い切って相談してみた。すぐ名をあげてくれたのが、乾昭三先生である。京大法学部の先輩に当たるといふ。石部さんの紹介で乾先生に連絡がつき、そして思いもかけず「授業の見学もなさって下さい」という快諾の返事が来たのだった。1973年の春ごろだったと思う。

東京都立大学にいた故・小沢有作氏、東大の大学院在学中だった田中孝彦、田中征男、細井克彦という若手研究者と私の5人が秋に東京から行き、また研究委員の一人で後に一般教育学会会長になられた扇谷尚氏(当時・大阪大学)も加わられて、訪問調査が実現したのだった。訪問は一度では済まず、翌74年初夏にもまたお邪魔した。

研究の成果をここに述べる余裕はない。部会で報告した後、総会でも全メンバーで報告し、また機関誌『教育学研究』にも2本の共同報告を載せている(『教育学研究』41巻4号、1974年12月。大学教育研究委員会編『研究委員会総会報告集(3)』1974年8月)。関心ある方はご参照いただきたい。書きたいのは、私どもと法学部とをつないで下さった乾先生の誠実かつ周到なご配慮である。

二

73年秋に伺った第1回のとき、先生はまだ学部長になっておられなかったように思う。だが私どもに先ず法学「基礎演習」(プロゼミ)のクラスの見学ができるように準備して下さっていた。

私どもは、4人の先生方の授業見学の便宜を与えられ、教室の後ろに座りながら、「小集団方式」ゼミの現実場面をじっくり見学することができた。また翌日には2回生対象の「基礎講読」にも参加した。

2回目の訪問の際は、乾先生はさらに大規模に教務委員長先生や学部首脳の方達との座談会も企画して下さい、加えて一部・二部双方の学生自治会メンバーとのインタビューまで用意して下さい。もちろん、どの先生とお話しするのも自由だった。2回を合わせて延べ十数人の教職員の方たちと自由にお話しすることができたのである。

こういう機会のお陰で、私どもは基礎演習の共通テキスト『ケース・メソッド法学入門』の編纂過程、基礎講読のテキスト選択の経緯、スタッフの方達の学術研究と教育努力の相即や葛藤など、実にさまざまなことを学ぶことができた。もちろん、「小集団方式」が編み出されてきた歴史的経緯、すなわちそれが学費値上げに端を発する学生との討論をきっかけとしたものであったこと、学習支援のために図書館がどんな努力を払っているかなど、東京で文献を読むだけではとうてい知ることのできない具体的な事実を知り、また目の当たりにすることができた。

さらに学生諸君や先生方の話から、授業を見ただけでは分からない学習や指導の状況、例えば発表前の研究室でのグループ指導の大切さと教員側の苦勞、1回生と2回生の学習姿勢やレポート作成能力の違い、先生方同士のシラバス検討の実践など、大学教育に関する貴重な実践局面について、「現場」の感覚に浸りながら知ることができたのだった。

三

これらすべてが可能になったのは、くり返すが、まさに乾先生のお計らいによるものだった。それだけでなく、先生は、ご自身が大学教育の当事者、固い言葉で言えば教育実践主体の一人であるお姿についても、私どもに示して下さい。

研究委員会総会での報告の中で、私は次のようなことを喋っている。

「印象的であったのは、基礎演習を見学する直前に、乾先生が私たちに見せて下さった去年の1年生が書いたレポートの分厚いファイルです。学生たちもこんなレポートを作り、皆に分かる話をするこ

きるようになりましたよ、と先ず喜ばしそうに見せてくださいました。これは私大の1回生学生に対する確実な教育実践の記念碑だ、と私は思いました。受動的な受験勉強に狎れ、しかも一般に他人の前で人に分かるような話をする能力が落ちている学生たちが、1年間にこのようなレポートを書くようになっていく。その事実の大きさに先ず打たれると同時に、そのことに感動して私たちに示して下さった教師としての姿勢に、私の方が感動したわけです。

よく整理されたファイル、乾先生の嬉しそうな顔を、今も思い出すことができる。

法学者らしく、几帳面で折り目正しい方だった。それだけでなく学生のことがいかにも頭から離れないという先生のように思われた。また、研究予算も乏しく息せき切った短い滞在の間に予定を詰め込んだ私どものスケジュールを理解され、2回とも1時間の無駄もなく調査できるように計らって下さった。実に有能なアドミニストレーターでもあった。

確か第一回訪問のとき、乾先生は志村治美先生とともに私どもの長いインタビューに応じて下さった。幸いその記録が残っている(前掲『総会報告集(3)』に収録)。その一部分を紹介しておこう。少し長いですが、先生の当時の肉声が聞こえてくるような思いがするからである。

「寺崎 ある改革が進む前提には、必ず、教員集団の有無が非常に大きなファクターとしてあると思います。学問上は進歩的あるいはマルクス主義的だったりしても、教育意識の点では古く、やったことを喋ればそれで教育になるんだ、というところで止まってしまふ先生をよくみかけますが、(こちらでも)研究至上主義の克服の議論をされたようですが、その過程はどんなものだったんでしょうか。

乾 歴史的な経過からいうとかなり古いんです。ノ先ほど申しましたように、文学部、理工学部などの学科増設に端的に表れるように、古い学問体系至上主義というのがあります。先ず、これとの対決がありました。二番目には、研究こそ中心であって、教育というのは手段

に過ぎないといえますか、生活の手段的に捉えるむきがありました。そういうものでは、ほんとうに学生に対応できないのではないかと、ということで、教育・研究の総合化・現代化・共同化という理念が生まれてまいりました。／法学部が、特に一・二回生の小集団教育にうきみをやつして、専門の研究の方はどうなっているのか、ということが一番の問題だと思うんです。この点も、最初は、今まで研究のことばかりやっていたんだから、教育のことについてもっと時間をさいてみようという形ではじまり、教育の方にだんだんと足をつこんでまいりますと、研究ができなくなる。そういう意味で教育と研究の時間が足りないという矛盾が出てまいりました。それを助ける一つの方法が、教育の面における教科研究です。1人でやろうと思っても出来ないが、同じプロゼミの者が集まれば、全専門を網羅しますので、それぞれの知恵を出すことによって進むのではないかと、こういう発想でした。この中で、最近出てきている新しい考え方は、教科研究といっても、単に教え方を学ぶのではない。そこで問題になっている事を、学問的に精練すれば、それこそ専門の研究ということになるのではないかと、だから、現場の学生との討論の中で、あるいは教科研究の中で、問題を見つけ出すべきではないかと、という発想です。こういう発想で、あらためて教育と研究を統一しようという動きが出ております。／教科研究というのは、教材、授業、学生の問題などを含んで、要するに、教育に関する研究です。」

四

乾先生について私が知っていること、おつきあいさせていただいたことは、実にこれだけである。もちろん、法律学者としての令名や社会的活動のご様子など、門外漢ながら仄聞したことがある。しかしもう30年前のことになるあのころの印象は、たとえ合計数日間の出会いといえども、忘れることはできない。

同時に、あのとき乾先生のご配慮のもとに立命館で学ばさせていただいたことは、さらなる大衆化と深刻な少子化が並行して進む現在の大学改革への対応にも通底する、多くの重大な論点を含むものだった。

憶い出の拙文を捧げて、感謝とともにご冥福をお祈りしたい。